

平成28年5月16日

## 札チャレラジオ通信 第19回

加納：三角山放送局をお聞きのみなさんこんにちは。

札チャレラジオ通信の時間でございます。

毎週月曜日午後3時からここ三角山放送局からお届けしております、札チャレラジオ通信です。

私は今日のパーソナリティのNPO法人札幌チャレンジドの加納です、よろしくお願いします。

札チャレラジオ通信は自立を目指す障害のある人がITでマザル・ハタラク・拓きあう社会を作りたい、そんな思いで活動しているNPOの番組です。2016年1月から1年間この三角山放送局からお届けしております。毎回札幌チャレンジドのスタッフが交代でMCをやっておりますが今日は私、加納と岡野が担当します、岡野さん、よろしくお願いします。

岡野：はい、よろしくお願いします。

加納：毎回毎回、素敵なゲストの方に来ていただいておりますが、今日は、とてもスペシャルな方に来ていただいております、ちょっとみんな緊張済みです。

岡野：はい。

加納：ではゲストの方をご紹介します。今日のゲストは、元札幌市長の上田文雄さんです、上田さん、こんにちは。

上田：こんにちは。どうぞよろしくお願いします。

加納：よろしくお願いします。お忙しい中、来ていただきましてありがとうございます。

上田：いいえ、とんでもございません、どうも。

加納：上田さんには、10年前ですね、札チャレラジオ通信がここではなかったんですけどもさっぽろ村ラジオでやっていたときにも一度出ていただきました。

上田：あー、そうですね。

加納：今日は10年ぶりのご出演ということで。上田さんはけっこういろんなもうテレビラジオね、出らおられますから、目の前にマイクがあってもびくともしないでしょう。

上田：あー、いや、なんか、お話しするのが仕事のひとつでしたのでね、こういうラジオというのはどなたが聞いておられるかわかりませんが、とても良い手段というか手軽なね、方法ということで、聞き流していただいてもいいですし、そうだと聞いていただいてもいいですし、いろんな意味で札チャレなどの活動をしていただくときにはですね、最適な手段かな。そんなふうに思って、さっぽろ村ラジオのときもですね、関心しておりましたけれどもまた再開をされて、この三角山で放送されると、いうのはとっても素晴らしいなと。もう19回もやっというらっしゃるんでしょ？

加納：そうですね、毎週毎週もうあつという間に19回。もう本当に早いですよ、毎週毎週。はい、ありがとうございます。ではですね、上田さんは去年の5月まで市長を3期12年務められまして、今は市長を退任されて弁護士としてご活躍されておられますが、市長時代を振り返ってみて、今1年たって、思うことというのはどんなことがございますか。

上田：そうですね、やっぱりあの、めちゃくちゃ忙しかったという感じがまずありますので、やってきたことっていうのはすべて大事なことばかりだというふうに思いますのでね、これという話はなかなかないんですけども、障害をもった人たちの政策として今まで目立った支援の仕方がなかったものを顕在化させたということからいえば、例えば元気ショップを作ったりですね、元気カフェをやってみたり、あるいは元気ジョブ、まあ元気プロジェクトっていいですかね、これは職員の方がネーミングがとても上手で、僕はあんまりピシっとしたネーミングは考えていなかったんですけども、元気カフェなんていうですね、とっても素敵だなというふうに思いましたよね。

加納：はい。

上田：あっちでもこっちでもということでやっていただきたいということで、今4つか5つになっていますかね、これは今姉妹都市がありますでしょう。韓国の大田市の市長さんが市役所においでになった日にですね、「これなんだ」と言うから、「これ、元気カフェっていうんです」とって障害をもった人達がお店を普通にやっていただいて、そしてみんな理解しあってね、いい関係を作っていくのにとってもいいですよと話したら、もういろんなことメモしていかれました、あの、韓国って早いんですね、やるのが。もう1年後にですね、会ったときにはもう8つ元気カフェできてるって。

加納・岡野：すごいですね。



上田：すごいんですよ。ああ、負けた、と思いましたね。それで、2年後の話なんですけど、知事の高橋さんがですねソウル市に、市役所に行ったって言うんですよ。そうしたらソウル市役所でね、障害をもった人たちがカフェをやってるんですよ。

加納・岡野：うん、うん、うん。

上田：あっ！私たちのパクったんですよって。もう、大田市の市長さんが宣伝してくれて、ソウルでも始めたって。

加納：そっか、じゃ、もう韓国中に。

上田：じゃ、もう北海道、道庁でもやってくださいよって。

加納：ほんとですね。

上田：そのように言っているんですけども。いろんなところで、人が集まる場所で障害をもっているひとたちが健常者の皆さん方と一緒に仕事をして元気な姿をみせていただく、生きがいをもていただく、ほんとうに利用者の方々もなんにも違和感なくそこを利用して、普通の人間関係をつくっていくことができるですね、壁を低くしていくというか、取り除いていくというか、そういうことに役立つとてもいい政策だったなというふうに思っております。

加納：市役所にあった元気カフェをモデルにけっこう今、就労継続支援サービス事業所なんかでも、カフェをやるところが非常に増えてきているんですね。

上田：うん、とってもいいですね。元気ショップもですね、いま地下鉄大通りの駅に、コンコースにありますけれども、これも一番最初に2003年ですか、私が就任した直後に障害をもった人たちの施設に行ったときにですね、パン作ってるんだけど売るところがどうもさえないで売れないんですよって話があって、じゃ売れる場所でやろうよってね、それで、私が提案して期待してますとかって言われて、それであの、大通りに作ろうということで、今の場所じゃないんですけども、作ってですね、パンだとか、商法作業所で作っておられるですね作品をそこで売ると展示をして売るといいますね、お店を作りました。とっても評判が良くてですね、もっと人通りの多いところということで今の場所にありましたけれども、非常に普通にですね、障害を持っているひとたちの作品に手を触れて、そして、定期的にも買ってもらえるみたいな方がたくさんね、おられて、非常に繁盛しております。これ商

品を売るということだけでなく、手にとってもらおうということが、彼らの作業が社会の中で役にたっている、社会参加しているってことを知っていただく、そういうことは利用者にそういう方々の活動に理解をちゃんとしてもらい、そういうコミュニケーションの場といいますか、そういうことで、とても良い市政だったなというふうに思います。

加納：そうですね、元気ショップにおいてあるものは、まあ、食べるものだったらおいしいし、雑貨系なんかでも本当に良いもの、クオリティの高いものがちゃんと目利きして。誰でも売れるわけじゃなくって。ちゃんとしたものを作った人がちゃんとした値段で売っている。

上田：そうですね。

加納：そこがやっぱりすごく大切なんだろうなって思うんですよね。

上田：いや、その通りですね。あの手の温かみがね、またね、わかるでしょ。商品自体に。そこがまた大事なところで、今、大量生産大量消費みたいな文化ではなくて、やっぱりひとりひとりが真に手をかけて時間をかけて、そこに心を込めていくというですね、そういう作業が行われているものがやっぱり人の心を掴むそして大事に使う。そんな文化を掘り起こしてくれ、非常に良い場所になるんじゃないかなと私は思いますね。

加納：そういう意味ではカフェでみんな気軽に障害のあるひとたちが触れ合う。ショップでは障害のあるひとたちが一生懸命作ったものをちゃんとした値段で買って、みんなでシェアをすると。最後三つめが元気ジョブですか。

上田：ジョブですね。

加納：仕事をね。

上田：仕事。これがやっぱりとても大事なことで、どのように仕事をしてもらうか情報提供し、そしてお願いをし、仲介をしていくというですね、そういうシステムですけども。これもまた本当に適正に応じたですね、作業をしていただくために、札チャレと同じような思想というか、考え方で役所が仲介していくというですね、市がそういうことをやっているわけで、障害をもっている人たちの社会参加ということで、とても大事な政策だと思っております。

加納：そうですね。三つに共通しているのが、役割分担であったり、行政の役割が何かって



ということなのかなぁと思っていました。まず元気カフェは、人が集まる場を行政が提供しているわけですね。市役所とか人がたくさん来られる場を提供して、その場で障がい者の人が一生懸命カフェで働くということですね。

上田：うんうん。

加納：で、二つ目の元気ショップというのは売る場。今度は売る場。売るっていうことは障がい者の人は苦手なわけですよね？

上田：そうですね、うんうん。

加納：パンを作ったり、いろんな雑貨を作ることは一生懸命だけれど売ることが非常に不得意。でもその元気ショップっていうものを運営しているのは、市が委託で運営しているわけだから。売るっていう行為を市が役割を担っていると。元気ジョブの場合は障がいのある人の作業所では、やれることはたくさんあるんですね。

上田：うんうん。

加納：札幌チャレンジドの中でもかなりのことをやれるようになってきている。出来ることはあるんだけど、その出来ることを外の人に知ってもらったり。いわゆる営業行為として：自分たちがこういうこと出来るんですよっていうことを社会に働きかけることは苦手なんですね。ほとんどの方が知られていないと。

上田：そうですね。

加納：障がい者の方がどうゆうことができるのか。それを元気ジョブには優秀な街の営業マンがいて、いろんな企業や市役所の中を歩いて。そうゆうことだったら、こうゆう作業所で出来ますよとか。あっ、こうゆうことだったらきっと何箇所かの作業所で分担すれば出来ますよって言ってやっていただいている。だからいずれも、それぞれのステージ、ケースバイケースで役所がすごく良い役割分担をしていただいているなあと。

上田：そうですね、ええ。足らざる部分と言いますか？そうゆう所をきちんと社会の中で適したその役割を果たしていく。そうゆうことなんですね。あまり出過ぎて何でもかんでもっていうのは、それはまずいわけで。そのミソっていいですかね。あんばいの付け方といいですか。

岡野：うーん。

加納：そうですね。はい、ありがとうございます。というようにお話ししているうちにあっという間に前半のパートが終わりまして。ここでちょっと一息ということなんですが、実は上田文雄さんは本当に多才で。

上田：あはは。いやいや。

加納：本業が何かと時々疑うぐらい、実は CD も出されていて。最初に出されたのが結構前ですよね？

上田：はいはい。1984 年かなあ。

加納：市長になられて、ふるさと札幌っていう曲を出されてそれで、僕は知ったんですけど。実は前から出していたのだよねっていうのを聞いて驚いていたのです。今日は、後半の話にも繋がっていきますが、今憲法の問題とかですね。この国の安全保障の話なんていうことも非常に大切なテーマだと思います。上田さんがジャパニーズ憲法という CD をお出しになっていて、その中に第 9 ロックっていう曲がございますので、是非その曲を皆さんに聞いていただきたいと思います。

加納：上田文雄さんの第 9 ロックでした。なんとこの曲ができたのが 30 年前だということを知って非常に驚いているのですが、今、世の中の時流を見ても、上田さん今、改めてこの曲に対する想いというのはいかがですか。

上田：あの当時もね、段々戦後生まれの人が多くなって。戦争を知らない子供たちっていう、そうゆうフォークの。

岡野：ありましたね。

上田：まさにそうゆう戦争を知らない世代が過半数を超えてですね、そしてその段々記憶が薄れてくる。平和の有り難さというか、そういったことも段々普通のことにも思えちゃう。これが作られるまでには 310 万人という日本人が第二次世界大戦で亡くなって。その大変な家族の想いがあるって、やっと出来たものですね、大事にしなきゃなんない。という想いで、

忘れちゃ困るよってことでまさに第 9 条という戦争放棄。これをその条文そのものを歌詞にしちゃったんですね。だから作詞/作曲の作詞は日本国民と。

加納：日本国民、あはは。

岡野：あはは。

上田：ということになっているのです。でこれは、稲村一志さんという、一昨年お亡くなりになりましたけれども。友達で。いろいろ話をしているうちに、やろうって言ったら、おおー、やるって言ってすぐ作ってきたっていう。で、そんな思い入れがあって。最近これが歌詞が変えられそうになっちゃって。

加納：そうですね。歌詞が変わっちゃたら、この CD はどうなるんだっていう。

上田：改訂盤出さなきゃならない。

加納：改訂盤出す？

岡野：あはは。

上田：これはちょっとねえ、問題があるので。この歌詞のままにしてほしいという想いで。今日はかけて頂きまして、ありがとうございます。

岡野：いえいえ。

加納：選挙権も次の参議院選挙から 18 歳になりますし。

岡野：うーん。

上田：そうですね。

加納：若い人達が憲法を、少し若い人達の場合に合った感じでね。理解してもらうには、こうゆう曲調で。

上田：そうですね。いま改憲論っていうことがね。たくさん言われております。変えたいのは、この憲法を変えたいってことなのですからけれども。9 条ですね。で、軍備を持ってない



というふうを書いてあるものをですね。自衛隊が今あるわけですけど。自衛隊が世界で活躍できる。世界の戦争に関与することができるような。そういうような状況に憲法を変えようという動きがあります。

加納：うんうん。

上田：それの一番の理由が、なんでそういうことしたいのか？っていうと。この憲法がアメリカのマッカーサーに押し付けられたんだと。戦争に我々は負けちゃったから、押し付けられたんだっていうような議論なんですけれど。実はね。そうではなくて、この憲法第9条の条文の内容っていうのは、日本人が提案をした。

岡野：うん。

加納：ほう。

上田：幣原喜重郎さんていう、当時の内閣総理大臣がマッカーサーに1946年の1月の24日に会談をして。その時に、彼は病気で、肺炎で大変寝ている間にですね。いろいろ考えた。何でこんなことになっちゃったのかと。戦争で人がたくさん死ぬようなことになったのかと、ずっと考えていて。それでやっとですね。これはもう戦争は一切無くすると。次の核爆弾が使われる時は世界は滅びると。だから戦争をしないっていうことが一番大事なんだあっていうことを提案したんですよ。マッカーサーは軍人なんですけれども、その通りだと言ってですね。

加納：うーん。

上田：マッカーサーノートに書いて、2月3日ですか。こういう憲法をつくろうっていうことで指示したんですね。ですから押し付け憲法でも何でも無いのです。日本人が世界に冠たる、世界平和を願った憲法をつくる。そういう提案をしたということなのですよ。

加納：なるほど。

上田：で、このことをね、ちゃんと残して置こうと、記録を。ということが今、ユネスコに世界遺産があるでしょう？

加納：はい、ありますね。



上田：文化遺産とかね。日本でも自然遺産、知床がそうですし。文化遺産になった富士山とかね。日本食とかってありましたよね。それと同じようなのが、記憶です、人間の記憶遺産ってのが。

加納：記憶遺産。

岡野：うーん。

上田：ございまして。2年に1度審査をして、登録をするかどうかということがあるのですけれども。この5月31日が一つの期限で。この幣原喜重郎さんとマッカーサーの証言。これを記録に残っているものを、記憶遺産に残そうと。というような運動が今やられております。インターネットで是非、引いていただければ、記憶遺産。そして第9条。というような所を引いていただくと出てくると思います。みなさん、そこからダウンロードしていただいて、サインして、ファックスを送ると。

岡野：なるほど。

上田：ということで誰でも推薦できるということになっておりますので。5月20日までだったかなあ。もうすぐです。

加納：推薦人になれると。

上田：そうそう。という運動をやっておりますので。これはとても大事なことです。世界に誇れる日本人の提案した憲法。そしてそれが70年、平和な戦争しない国として。東南アジアのご迷惑かけてね。あとはアジアの皆さん方からも信頼される。日本を形成してきた、大事な、大事な条文ですので。

加納：はい。

上田：それは押し付けられたから、何とかという話じゃなくて。日本人がきちんと考えて作ってきたんだということを残していくっていう運動ですので。是非とも皆さん、参加していただきたいなあ。そんなふうに思います。

加納：そうですね。まずはその関心を持っていただいて。その中に書いてあることを自分なりに読み込んでいただいて、賛成、まあ中には反対っていう方もいるかもしれません。

岡野：うんうん。

加納：まずは関心を持っていただきたいですね。

上田：そうですね。是非、レコード・CD もあまり残部が無いのですけれど。と言いながら次々出てくる。あはは。

岡野：あはは。

加納：増盤した方が。でもこのCDはそれこそ今、選挙も若い人達が政治に関心を持つ時代になってきているので。そういう人達に改めて、こういうモノを通してですね。考えるきっかけにしていただければ良いじゃないかなあと思います。

上田：そうですね。やっぱり何かきっかけが無いとね。

加納：そうなんですよね。何かこう教科書に書かれている難しい形で捉えるんじゃなくて。こういう曲を通して、何か体をリズム取りながらでも。頭ではしっかり、その歌詞のことを思い馳せるっていう。

上田：そうですね。憲法前文っていうものがありましたよね。これは増田さんという弁護士が歌っているのですけど。企画して作ったのですけど。この憲法前文には平和的生存権っていうのが書かれております。我々は本当にトラブルをやってですね、戦争をやるのじゃなくて。平和的にみんな生存する権利があるのだと。その具体化があの9条なのですよね。

岡野：うん。

加納：なるほどね。

上田：ですからそういうものを読み込んでいただいて。あの先人の苦勞と、そして豊かな生活を我々はどうやって形成してきたのかということを常に私達は考えて、そして僕らが子孫に責任としてね。僕らは70年、戦後生まれの人達は戦争しないで平和に生活してきたわけですよね。それをちゃんと伝えていく義務があるんじゃないかなというふうに思いますので、是非関心持っていただければうれしいなと思います。

加納：ありがとうございます。今日の札チャレラジオ通信は。

岡野：すごい内容ですね。

上田：あはは。

加納：さすが高尚な番組になりましたね、あはは。本当にことうゆう社会のことに関心を持っていただくということが、我々の市民活動にも大変重要でございます。上田さん今日は本当にお忙しい所、ありがとうございました。

上田：ありがとうございました。

岡野：ありがとうございました。

加納：是非、ご健康に気を付けられて。

上田：そうですね。本当に札チャレ頑張ってください。

加納：ありがとうございます。

岡野：ありがとうございます。

上田：ありがとうございます。

加納：では今日の札チャレラジオ通信はここまでです。ありがとうございます。

岡野：ありがとうございます。

上田：ありがとうございます。

加納：さようなら。